

離宮八幡宮

9 世紀に離宮八幡宮の宮司が種子から油を搾る搾油機を発明し、これが日本の荳胡麻油製造の始まりとなりました。当初、荳胡麻油は朝廷や神社仏閣の灯火の燃料として使われましたが、徐々に一般人にもその利用が広まりました。離宮八幡宮は荳胡麻油の製造と販売で長く栄え、朝廷によって独占的な特権を得るに至りました。荳胡麻油を販売する全ての商人に、この神社からの特別な許可を得ることが必要となりました。

由緒

離宮八幡宮は、その由緒と霊泉井戸でも知られています。伝説によると、859 年に僧の行教が天皇の命により八幡神を九州から京都に遷座し、この神社を創建しました。行教は清水が湧き出る場所として、現在の「離宮八幡宮」の地を発見し、建立地として選びました。八幡を祀る本殿の左側には「石清水」という井戸が今も残っています。興味深いことに、京都府の男山にある石清水八幡宮にも似たような由緒があります。

境内

鳥居の右側には、荳胡麻油の容器を納める宮司の像や、神社創建 1100 年を記念してつくられた全国の油脂業者が使用するための黒と黄色の標識、そして搾油機のイラストが描かれた看板があります。離宮八幡宮では、瓶詰めの荳胡麻油や、宮司の像と油売りを描いた絵馬、そして「油断大敵」（直訳：「不注意は最大の敵である」）のお守りを販売しています。この熟語は不注意（ゆだん）の表現を「油がなくなる」という意味の漢字で書くという、言葉遊びのニュアンスが含まれています。神社に奉納された搾油機のサイズを半分にした模型は、祭りの際に公開されます。